あかしずえ

2023年8月
第740号

日本基督教団　平塚教会
発行人　平塚教会
編集人　中山洋司
〒254-0045　平塚市見附町6-18
電話　〇四六三（32）八八三一

教会を退会するには

平塚教会牧師　北川一明

神は真実な方です。この神によって、あなたがたは神の子、わたしたちの主イエス・キリストとの交わりに招き入れられたのです。

（Ⅰコリント一・9）

カルト宗教に入ると、後に洗脳が解けても、宗団から抜けるのは簡単ではありません。神罰や呪いをあげつらって脅すなどの嫌がらせを受けます。

キリスト教会にも新興のカルト的な教派がありますが、平塚教会の属する日本基督教団など伝統的なキリスト教会は違います。退会を望んでいる人に対して圧力をかけることはありません。

ただ教会組織として、または信徒個人が、善意から働きかけをすることはあります。善意は圧力と誤解されることもありますが、それでもそうした働きかけは増やしたいと考えています。

【クリスチャンをやめられるか】

キリスト教には「還俗」はありません。「洗礼」は牧師を通して神が行う《秘蹟》の一つです。「洗礼を受けた」という過去の事実を変えることができない以上、神が記した「命の書（黙示録二〇・15ほか）」から、人間が勝手に名前を消すわけにはいきません。一度洗礼を受けたら死ぬまでクリスチャンです。

もっともこれは教会側の受け取り方であって「信徒連中が勝手にそう考えているだけだ」とも言えます。

神社が地域の人たちを勝手に「わが神社の氏子である」とみなしているのと同じです。キリスト教会にもパリッシュ（小教区）という考え方があります。人間は皆が神に愛され、少なくとも平塚市見附町、紅屋町、立野町あたりの人たちは、神から平塚教会を通して祝福されていると考えるのがパリッシュです。

【教会を退会できるか】

これも「教会側が勝手に言っているだけ」と言えばその通りですが…クリスチャンをやめることがない以上、教会に「退会」という概念はありません。書類上はどこかの教会に属し続けます。

もっとも教派によっては教会籍を管理しないところ

目　次

教会を退会するには　牧師 北川一明 …1
教会と幼稚園の花壇から　棟方充子 …3
幼稚園と教会学校の花の日礼拝 …3
貝原使徒子姉とのこと　市川明子 …4
編集後祈 …4

もあるでしょう。自分で単立「私ひとり教会」を作ったことにするのも可能です。そうした教会に転出すると申告すれば、紙の上に名前が書いてある状態をクリヤできるでしょう。

「別帳会員」という種類の会員になることはできません。平塚教会には「現住陪餐会員」「未陪餐会員」「他住・在宅陪餐会員」という三種の教会籍があるだけで「別帳会員」という籍はありません。

教会規則には、三年間礼拝出席がなく献金もない場合に「別帳に移すことができる」と定められています。連絡の取りようのない人については教会側の判断で名簿を別に分けることがあります。

【バチや呪いはあるか】

「主は与え、主は奪う（ヨブ一・21）」とあるのは命だけではありません。信仰も主が与えたものです。信仰を棄てたらバチはあたるかという前に、信仰を棄てることが出来るかどうかが謎です。

それでも本人が信仰を棄てたつもりになることはあります。その場合、いわゆる「バチがあたる」ということはないはずです。平塚教会の信仰は、金が儲かる／病気が治る／恋愛が成就するといった御利益とは無縁の魂の救いを宣べ伝えています。ですから教会から遠ざかっても、神を呪ったとしても、それが直接の原因で金が無くなる／病気になる／失恋するということはありません。

【何の問題もないのか】

現世的にはバチはあたらず呪いもないのであれば、何の問題もないのでしょうか。問題どころか、信仰を棄てると良いことがあるかもしれません。

生き方を変えることが人生にどういう意味をもたらすかをきちんと考えると良いでしょう。かつて信じる決意をしたことと向き合えば、教会に戻ろうという気持ちになることも大いにあり得ます。教会側はそれを期待します。しかし真摯に向き合って、その結果改めて信仰を棄てる決意に至ったのならば、一度信じた信仰を棄てたことが人生に良い影響を与えることもあるかもしれません。

ただ「向き合う」ことは簡単ではありません。人間にありがちなのは、心の奥にうしろめたさを抱えながら、他人のせい、環境のせいにすることです。聖書には「**人々は…光よりも闇の方を好んだ。それが、もう裁きになっている。悪を行う者は皆、光を憎み、その行いが明るみに出されるのを恐れて、光の方に来ないからである**（ヨハネ三・19、20）」とあります。「**光の方に来ない**」とは、教会に来る来ないではなく「自分自身の真実と向き合わない」と捉えることもできます。

教会は、真実と向き合うお手伝いができます。しかし向き合う主体はあくまでご本人です。

【気持ちの負担】

気持ちが離れ切ったわけではないが教会に戻るきっかけがつかめないというかたのために、教会では郵便物を送っています。

郵便物（またはその背後にある教会員の祈り）が気持ちの負担になるというかたがあります。郵便は「受取拒否」することはできます。受取拒否に費用はかかりません。そこまでしなくとも他のＤＭと同じく捨てれば済むことです。

問題はそこではなく、過去の自分の決意が失われたという事実を突きつけられる点でしょう。何事でもきちんと向き合えば、その結果どう決断するのであっても、人生は悔いのない豊かなものになるでしょう。そのために教会は祈っています。

教会と幼稚園の花壇から

棟方充子

私はお花の事が大好きです。平塚教会と附属幼稚園の花壇のお手入れに、皆様方とご一緒に携わらせて頂けることを大変嬉しく、奉仕の場をお与えくださり感謝しております。

今年の幼稚園花壇の植え付けは、例年とは異なり、幼稚園の先生方と何時もお手伝いしてくださる教会員の方々に中山（洋）先生も加わって頂き作業することができ、作業の後に皆様方と出来た楽しいお話の時間はとても楽しく、先生方とお近づきになれ、教会と幼稚園のお交わりができて感謝でした。

5月29日にはきく組さんの園児と先生方に、日下部明美姉とともに朝顔の種まきをしました。小さなポットに指で穴を開け種を播きましたが、その時一人の園児が、種を見て「石ころみたい」との呟きに、先生は「石ころのように見えるけれど、神様から頂いた命があるのよ。だから大切に植えて、お花が咲くまでお世話をしましょうね」と話され、「ハーイ」と応じた園児との遣り取りは嬉しい光景でした。時間と共にそれまで砂遊び感覚だった子ども達の動作は、その遣り取りに因り変わりました。最後は「優しくお布団を掛けてあげてね」に、子ども達の土をかける手つきは微笑ましいものでした。少し難しい作業も、楽しいお喋りとともに終えることが出来感謝でした。皆様もフェンスに咲く朝顔を楽しみにしてください。

［年中 朝顔種蒔］

6月7日の幼稚園の花の日礼拝は、教会祈祷会出席者と守った後、園児のお母様方と花束作りのお手伝いをさせて頂きました。多くの方々が参加され楽しい会話の中でミニブーケ制作教室を開くことが出来ました。小さな交わりのスタートですが幼稚園と教会が繋がって行くことを願っています。

教会の託された附属幼稚園が多くの稔りを得れますようにお祈り致します。

幼稚園と教会学校の花の日礼拝

花の日礼拝は、草花の成長に合わせて子どもの成長を神に感謝し、お世話になっている人に感謝を表す日です。

幼稚園児は、祈祷会に出席されている教会員と保護者の皆さんとご一緒にたくさんの花に囲まれて礼拝を守りました。

そして、教会員とお母様方が作ってくださった花束を、幼稚園中のお部屋に飾りました。また園長先生宅と運転手の坂田さん・給食でお世話になっている「ごちそうさま」さんには、つぼみ組（年少）の子ども達から花束とカードをお渡ししました。

例年は、警察署と消防署にも、子ども達が出向いていましたが、今年度はまだコロナの影響のため、子ども達が作成したカードを教師が届けました。

教会学校では、大人と子どもで礼拝を守った後、皆さんでご高齢のお方を思い浮か

べながら手作りカードを作成しました。そしてそれぞれにコメントを書き郵送しました。たくさんのカードの内、一枚だけ紹介します。

［手作りカード］

皆様お元気になられて、平塚教会にお出かけください。お待ちしております。

貝原使徒子姉とのこと

市川明子

週報で使徒子姉の訃報を目にした時、思わず「私より若いのに！」と怒りにも似た思いの籠った言葉が、口をついて出ていました。

思い返せば、平塚教会で教会生活を共にしたのは、半世紀にも及ぶかと思います。

岡本不二夫牧師の時代には、専属のオルガニストが不在だったため、使徒子姉と交代で一週おきに奏楽の奉仕をしたこともありました。

毎月あった婦人会の例会では、母上の寺田節子姉もご一緒でした。年を重ねるにつれて使徒子姉は、母上にそっくりになられて、いつぞやのこと、形見の母上のワンピースを着て礼拝に来られた時には、往時の寺田姉がそこにいるのかと思うほどでした。

少し前から礼拝後の帰路は、使徒子姉とご一緒していました。ラスカまで歩いていたのに、歩くのがつらくなっていつの間にか、旧市民センター前のバス停から、バスに乗るようになっていました。

いつもの店で昼食をすませ、店の前で「ではまた来週、気を付けてね」と挨拶し合って、使徒子姉はエスカレーターで下へ、私は書店へと分かれるのが常でした。

「ではまた来週」はなくなってしまいました。

なくなる前の日曜日も、その前の週に御用があって郷里の多治見に行ってくると聞いていたので、「ご用が済んだの？」との問い掛けに、済ませた後で、60年来の友人達と楽しい時を過ごしたとのことでした。「60年来の友」とは使徒子姉の口からよく出ていたことです。

長いお交わりでしたが、それほど深い交流でもなく、訪ね合ったり、電話をし合ったりすることもなく、淡々としたおつき合いでした。それでもなくてはならぬ大切な教友でした。

遺影の使徒子姉は、在りし日の姉そのままの、屈託のない笑顔でほほ笑んでいました。あの写真を選んだ二人のお子様方との、温かい家族愛を感じました。

主の御手のうちに在って安らかにと
祈りつつ

編集後祈

大雨の地域と猛暑の地域、地球はどうなっているのでしょう。主の御心の内はと？ただ祈りと信仰をもって、主に従って歩むのみです。

（編集子）